

岡上淑子作品における〈層〉——「着せ替え人形」の観点から

内村麻奈美(早稲田大学)

岡上淑子(1928-)は、戦後にスタイル画家を目指して進学した文化学院で受講したカラーコーディネイトの授業から着想を得、『VOGUE』『LIFE』等雑誌の写真の切り抜きと貼り合わせによる作品を制作した。これら作品群が瀧口修造によりコラージュとして評価され、タケミヤ画廊での個展(1953年、1956年)や「抽象と幻想」(1953年、東京国立近代美術館)での展示を行う。

「コラージュの美学」(『美術手帖』1953年3月号、美術出版社)等に明らかなように、瀧口は岡上作品をマックス・エルンストのコラージュと結び付けて評価した。岡上自身も1951年頃、瀧口に見せられたエルンスト『百頭女』(1929年)の影響から無地だった作品背景に写真を用い始め、雑誌等ではコラージュを紹介する立場からテキストを発表した。だが同時に、岡上は自身の作品とシュルレアリスムを無関係なものとし、コラージュという呼称に一定の距離をとるテキストを発表している。

そこで本発表では、エルンストとの差異の指摘を起点に、岡上作品をコラージュという呼称の前提から捉え直す。これにより、シュルレアリスムとの関係を強調する瀧口の紹介によって評価が方向づけられてきた岡上作品に、従来とは異なる分析の可能性を見出すことを目的とする。岡上とエルンストの差異については既に複数の先行研究が存在するが、本発表では従来注目されなかった作品自体の構造に着目する。印刷による完全な平面化を前提とするエルンストのコラージュと異なり、紙片の収縮を防ぐため僅かなヤマト糊が点状に使用された岡上作品は、紙片同士が密着して貼り合わせられることなく、浮いたまま重なった〈層〉状の構造を持つ。両者の対比からは、コラージュという呼称が語り落すものとしての岡上作品の〈層〉が見えてくる。

岡上はシュルレアリスムとの一定の距離をとりつつ自身の作品を「着せ替え人形」(岡上淑子『はるかな旅 岡上淑子作品集』河出書房新社、2015年)と称する。切り抜きと〈層〉状の貼り合わせにより憧れの装いを所有する紙製着せ替え人形は、日本では江戸後期頃から親しまれてきた一方、規範を反映した図像を通じ、社会で期待される女性像を女兒に学習させる媒体としても機能してきた。本発表では、女性の顔写真に衣服や異物を貼り合わせた《ダンス》(1951年)等の初期作品を起点に、着せ替え人形の規範を攪乱する試みとして、岡上作品における異物の貼り合わせを分析する。さらに〈層〉を衣服と身体の関係という視点に発展させ、紙片同士を重ね・ずらすことによって達成される一部の隠蔽や奥行き表現といった〈層〉構造に特有の操作が、異物を〈着せ替え〉る岡上作品においていかに活用されているかを検討する。これにより、平面的な貼り合わせを前提とするシュルレアリスムのコラージュの文脈から外れた岡上作品の一面とその特異性を明らかにする。